

JKが好き



後輩のJK

「先輩がこんなお願いするなんて」

「俺も男だからな」

「変態さんだったんですね」

「いや、普通だ」

「こんな格好、全然普通じゃないですっ」

「可愛いよ」

「今言われても、あんまり」

「そうか」

おぼんつはどんな香りがするのだろうか。実に興味深い。そつと顔を近づけて。すんすん。脳を刺激する甘い匂いだ。おつと毛がはみ出してるな。ずらして見たい。おまんこは一体どんな形をしているのだろうか。

「鼻息荒いし、近いです」

「おつと、ごめん。堪能してた」

「やっぱり変態ですっ」

「いや普通だ」

「パンツに鼻を押し当ててスーハーしてる人のどこが普通なんですすかっ」

「目の前にパンツがあれば嗅ぐのは自然の節理だ」

「そんなわけないでしょっ」

「触って欲しいのだろうか。なでなで。」

「あつ、あんっ」


「どうした、そんな声を上げて。まさか感じているのか」

「そんなわけ、んっ、ない、ああっ」

「何とも説得力に欠けるな」

それにしても可愛い声だ。俺のあそこがガチガチになっ  
てしまっている。

「んっ、そこはあ、ああっ」



いかんいかん。このままだと欲望に負けて大変な事になつてしまう。まだ時間はある。じっくりと楽しまなれば。

「ちよつと上着の中を見せてくれない？」

「別にいいですけど、はい」

「これじゃない感。」

「恥じらいが足りない」

「下見られちゃってるので何だかもう」

「ほう」

「なでなで」

「あつ、んんっ」

「いい声だ」

「せ、せんばいつ、いじわる」

「どうして欲しい」

「もっとたくさん触って欲しいです」

「素直なのはいい事だね」

「ん、気持ちいい」

「もっと気持ちよくなるにはどうすればいいでしょう」

「恥ずかしいけど、見てください」

「先ほどとは違いゆっくりと上げたり下げたりしてくる。」

「良いな。ご褒美をあげよう。指先でパンツ越しに筋をゆ」

「つくりと撫で回す。」

「ああっ、ううっ、あんっ」

「体が小刻みに震えている。可愛い。指先に湿った感触」

「が伝わってきた。」



撫で続けているとどんどん湿ってくる。これはきつと中が大変な事になっていくだろう。手をかけパンツをそつとずらす。指にぬるりとした温かいものが触れる。これがJKの愛液。

上の方に毛がある。JK陰毛か。やはり縮れているのか。触ってみるとシヨリシヨリしてなかなか興奮する。直にスジに触れてみる。パンツ越しとは全く異なる感触が手に伝わってきた。温かくてぶにぶにぬるぬるしててたまらない。

「んっ、先輩っ、そこは」  
足を閉じていやいやしてくる。

「だめ？」

「だめですっ」

「見たいなあ」

「ダメっ」

「どうしても」

「恥ずかしいです」

「そっか」

「他のお願いにしてください」

「だめと言われると逆に、そつと。」

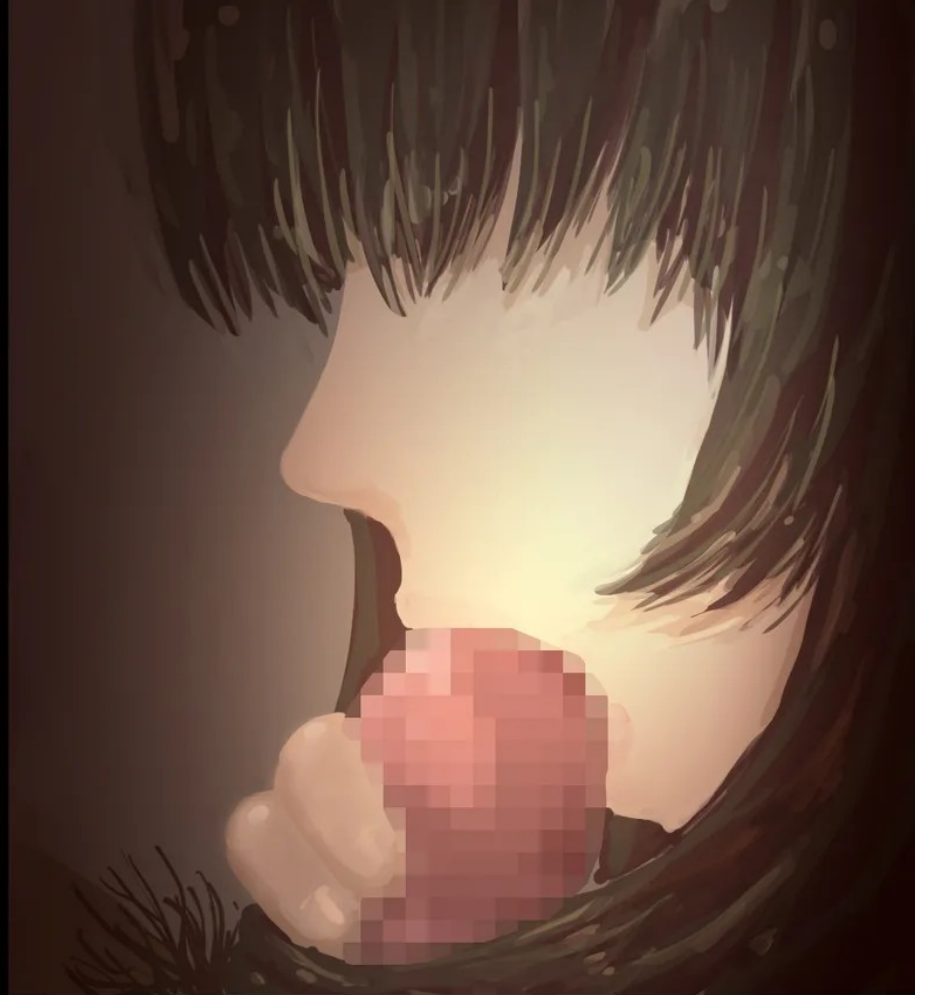
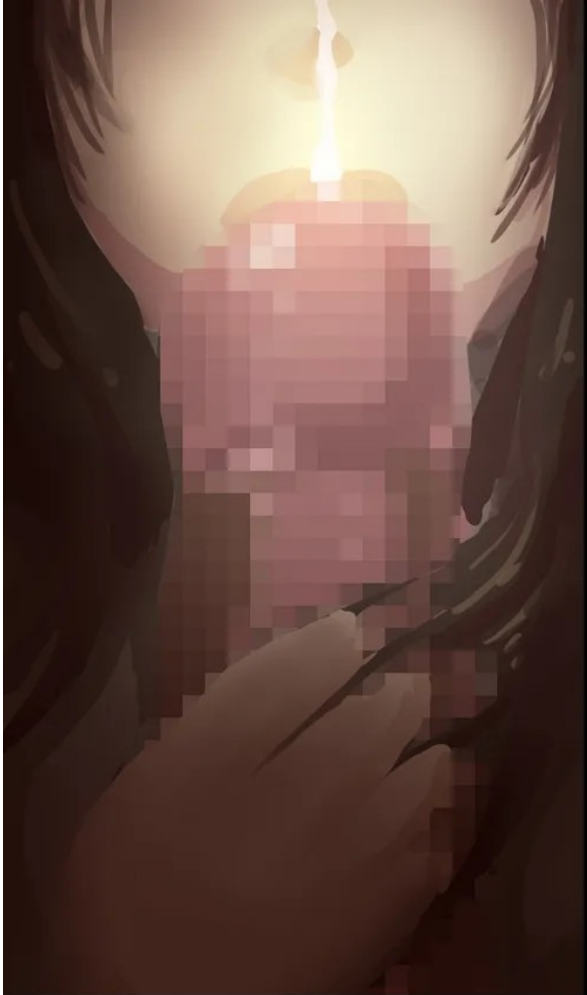
「先輩っ」

「わかった」

「別の事をお願いするか。」



「触ればいいんですか」  
「うん」  
「抵抗ある？」  
「いえ、先輩のなら大丈夫ですよ」  
「それじゃあお願い」  
「こんな形してるんですね」  
「そんなにじっと見られると」  
「ビクビクして大きく、痛くないんですか」  
「うん、興奮してるだけだから」  
「良かったら髪も使ってくれるかな」  
「また変態的な発言してきましたねっ」  
「そうかな？」  
「確実に変態だと思えます」  
「そっか、ダメか」  
「別に駄目とは言ってません」  
「いいの？」  
「まあ、減るものじゃありませんし」  
「わーい」  
「そんなに目を輝かせて、子供みたいですね」  
「嬉しくて」  
「こんな感じですか」  
「うん、ありがとう」  
「こんな事して喜ぶなんて」  
「えへへ」  
「寝めてないですからねっ」



「んっ」

お口に触れてる。手とは全く異なった感触が  
ちんぽに伝わってビクビクと反応する。

「痛かったですか？」

「ううん、あまりに気持ちよくて」

「ならいいですけど」

「心配してくれるなんて優しい」  
頭をそっと撫でる。

「んん」

舌で恐る恐る舐めてくる。おっかなびっくり  
な様子が見ている微笑ましい。ビクビク動く度  
に大丈夫かなと止まっては繰り返し舐めてくれ  
る。

「気持ちいいよ」

「んっ、ちゅぱっ」

それから手と髪と舌を使って丁寧に奉仕して  
くれた。されるがままにのんびりと眺める。段  
々と何かが込み上がってくる。一生懸命にしゃ  
ぶってくれている姿が可愛くて愛おしくて出し  
てしまった。

「わわっ」

気持ち良さに呆然として、びくびくと飛び出  
す白い液体をただ眺めていた。



「どれだけ出してらるんですか」  
「んん」

「ベタベタなんですけど」

「ご、ごめん」

「何で言ってくれなかったんですか」

「一度ぶっかけてみたくてなんて言える雰囲気じゃないな。」

「気持ち良くて気づいたら出てた」

「そうですか」

「あまりに上手で」

「上手いと言われて嬉しいと思いますか？」

「どう？嬉しい？」

「聞ってるのは私ですっ」

「嬉しいと思ったから言ったんだけど」

「そうですか」

「はい、これ」

ティッシュを手渡す。

「どうも」

「髪にまでかかってしまっている。」

「言ったら飲んでくれたの？」

「私はそのつもりだったんですけどね」

「じゃあっ」

「今日はもうしません」

「そんなん」

「また今度、気が向いたらしてあげますから」  
「うう」



目隠しプレイがしてみたいだなんて、先輩の変態っぷりには驚き。でも見えない分感覚が敏感になってるのがわかる。

「きつくはない？大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

変態だけど、私の事よく気にしてくれるし悪い人じゃないんだよね。たまに発言にびっくりするけど。

「痛かったら言っってね」

「はい」

あっ、先輩のが入ってくる。大きくて熱くて私の中広げられちゃう。

「あっ、んん」

ゆっくりゆっくり押し込んでくる。もうちよつとで奥に。

「入ったよ」

「はい」

あれ、動いてくれない。どうしたんだろ。いつもだったらガツガツしてるのに。今日は調子悪いのかな。それとも私のあそこ緩くなっちゃった。と思ってたら動き出した。

後ろからパンパンされて何だか無理やり犯されてるみたいで興奮しちゃう。



後ろからつくの気持ちいい。

「ばちゅんっばちゅんっ」

「あっ、あんっ」

腰を押し出すとそれに合わせてお尻をグツとこちらに押し付けてきてくれる。奥に一番奥に擦り付けたい。

「先輩っ、きもちいいっ、もっど」

お互いに貪るように腰を振る。

「あたって、奥にいつ、んっ」

ちんぽが出たり入ったり。おまんこ気持ちいい。ずっとこうしていたい。

「せんぱいっ、わたしっ、もうっ」

体がひくひくしている。おまんこもぎゅうぎゅうと締め付けてくる。たまらん。腰をおまんこの最奥めがけて押し込む。

「あっ、いくっ、んんんっ」

彼女の体がびくびくと震えると同時にこちらも盛大に発射した。

「ああっ、出てるっ、いっぱい出てるうう」

「目一杯押し込み最後の一滴まで流し込んだ。」



「ちよっと、先輩少し休憩したいです」

「ごめん、無理」

「ええっ」

「体がエロすぎて我慢できない」

「あっ、私、んっ、いったばかりで」

「体ひくひくしてて最高に可愛いよ」

「んっ、そんな事、ああっ、言われたって」

腰を欲望のまま打ち付ける。こんな気持ちの良い事やめられるわけがない。今日という日が終わってしまったら次はもうないかもしれない。

「んっ」

体勢を変えたら全然感触が違う。おまんこ凄いい。もっとたくさん色々したい。出なくなるまで何回でもやりたい。

「ああっ、ちよっとっ、まっ」

おまんこがびくびくと震え再度きつく締め付けてくる。おかまいなしに腰を振る。

「いまあっ、いって、ああっ」

可愛い、エロい、たまらない、止まらない。気持ちいい、もう何も考えられない。ばちゅっばちゅんっばちゅんっ



「先輩、出し過ぎです」

「ふう」

「ふうじゃないですよっ」

「ありがとね」

優しく頭を撫でる。

「むう」

ちゅっ

「んっ、先輩のまだ大きいですよ」

「えへへ」

「寝めてるわけじゃないですから」

「あっ、まだ欲しいのかな」

腰をゆっくりと動かす。

「あんっ、今日はもうお腹いっぱいです」

「本当に？」

「本当です、抜いてみるといいですよ」

「見ていいんだ」

「じゃないと終わらなそうなので」

「流石に少し疲れたよ」

「それなら良かったです」

起き上がりゆっくりと腰を引いていく。

ドロリと白い液体が溢れ出してきた。

「凄い量でしょ」

「ははっ、ほんとだ」

「笑い事じゃないですっ」



ぬいぐるみ好きのJK

- 「こんなぬいぐるみ好きなんて変ですよね」  
「全然変じゃないよ」  
「本当にそう思ってますか」  
「うん、思ってる」  
「口だけでは何とでも言えますよ」  
「それはそうかもしれないけど」  
「それじゃあ私を抱いてくれますか」  
「いいのっ」  
「はい、こちらがお願いしてるんです」  
「それじゃあ」  
「服をまくるとそこには大きなおっぱいが」  
「私大きいのがコンプレックスで」  
「俺は好きだよ」  
「痛くないように優しく撫でる。」  
「私の胸どうですか」  
「柔らかくて最高に気持ちいいよ」  
「証拠はありますか」  
「ここ触ってみて」  
彼女の手を誘導し自分の股間へと導く。  
「これは」  
「凄く大きくなってるでしょ」  
「はい、嬉しいです」  
「俺もだよ」



「私セックスしてるんですね」

「うん、そうだよ」

「私としたい人がいるなんて思ってもいませんでした」

「こんなに魅力的なのに」

「それも本当なんですけどね」

「やっとなんかわかってくれた」

「はい、体は正直ですから」  
肉棒をおまんこにゆっくりと出し入れする。

「どお、痛くない？」

「何だかお腹じんじんして温かくて不思議な感覚です」

「続けて大丈夫かな」

「はい、お願いします」

「ちゅうしてもいい」

「いいですよ、というか聞かなくて大丈夫です。好きにしてください」


「ん、ありがとう」

ちゅっ

彼女の唇に自分の唇を重ねる。

「ちゅぱっ、何だか落ち着きます」


「えへへ、良かった」



## 通りすがりのJK

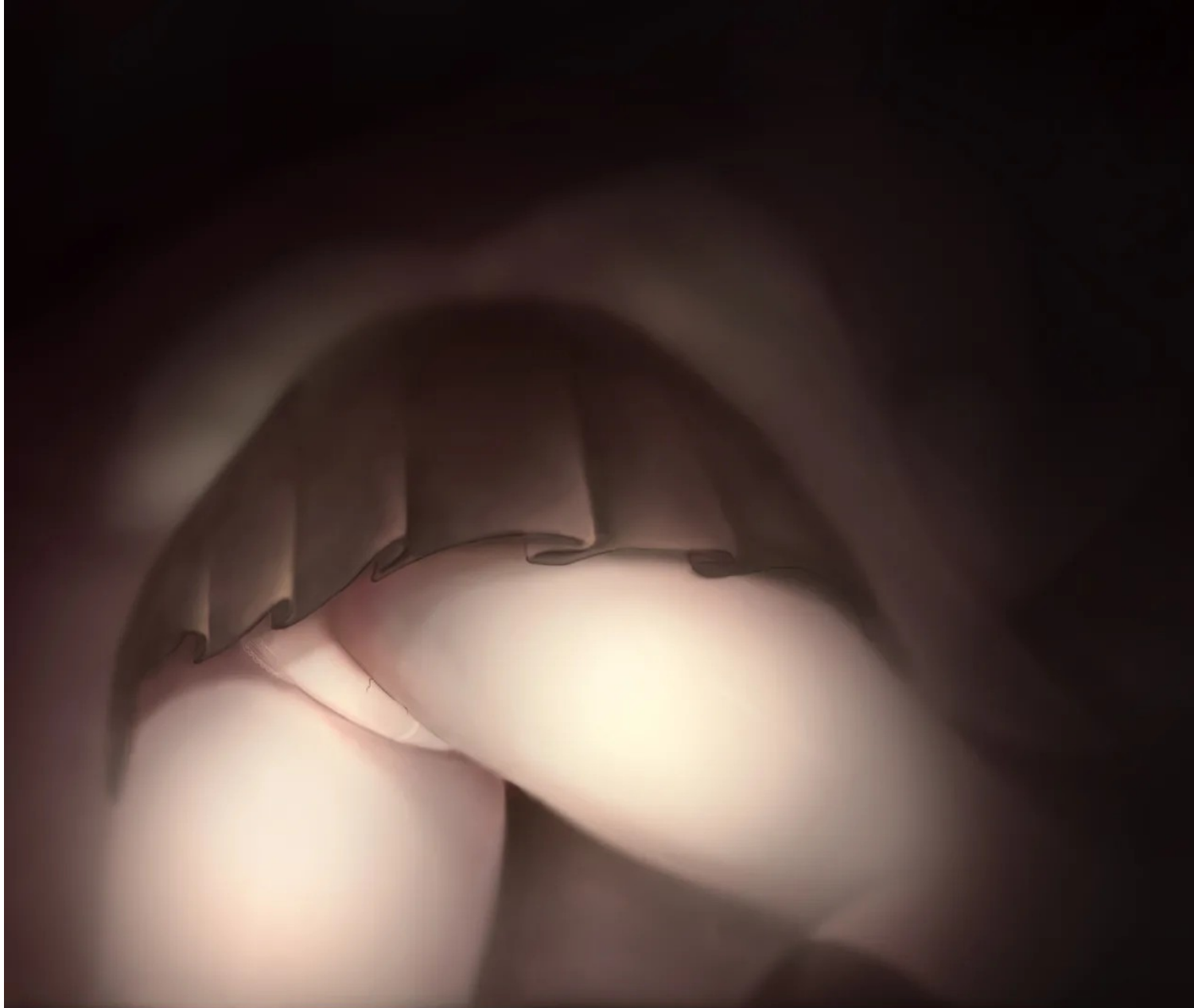
今日凄い女の子を見かけた。食堂でカウンターに前のめりで注文していたのだ。どうなっていたのかというと見えていたのだ。可愛らしいものがしっかりと。幸いその時は空いていて他の目撃者はいないようだったが、こんなに無防備な姿を見せるなんて何を考えているのだろうか。誘っているのか。いやいや。「見てたでしょ。精神的苦痛を受けたから慰謝料ちょうだい」とか言ってくる感じかもしれない。これは関わらない方がいいな。目に焼き付けて、さっさと立ち去ろう。

それにしても何であんな布切れに興奮するのだろうか。謎だ。むしろ中身に興味を持つべきだろうに。だがしかし自分には縁の無い事かもしれない。どう接していいのかまるでわからないのだ。話もうまくできないし、他人と目を合わせるのも苦手だ。外出も好きじゃないし一体どうすれば。同じような感じの子を見つけて、二人でのんびりゲームとかしたい。ソファに座って手を繋いで映画を観たり、感想を言い合ったり、うとうとしたり。できない事を嘆くのではなくどうやったらできるかを考えればいいのだと思う。女子と仲良くなる方法。誰でもという訳ではなく自分の好きな性格とか同趣味で気の合う相手。この世界の中に一体何人そう思える相手がいるのだろうか。一人見つけてずっと一緒にいられるのがきつと幸せという事なのだろう。



食堂を立ち去り廊下を歩いていると階段のある場所に通るかかった。視界に入った白いものが気になり視線をそっと向けてみると、またしても見ているいけないものが。うっ、俺は今禁欲中なんだ。なぜこんなイベントばかりに遭遇する。これはまさか神の試練なのか。これに耐えて乗り越えてみせろと言っているのか。

オナニーしたい。無性にそう思う時がある。これは誰でも同じなのだろうか。自分は恥ずかしがり屋かどうか知らないが、他人とそういう類の話をしたことが無い。だから他の人がどのくらいの頻度、どのくらいの時間をかけてやるのか、やっていい事なのか悪いことなのかわからないのだ。前に授業でそういう類の話をして先生がしていた時も何だか頭にもやががかったようになって、気づけば授業が終わっていた。保健体育もしっかり勉強するのが何だかいけない事のような気がしてうまく勉強できず、点数が悪かったのを覚えている。昔パソコンでエッチなサイトを見てパソコンが壊れた。その時に悪いものだというイメージがついてしまったのかもしれない。後は風呂場でしていた時に扉越しに家族に気付かれ凹んだ事も関係あるかもしれない。



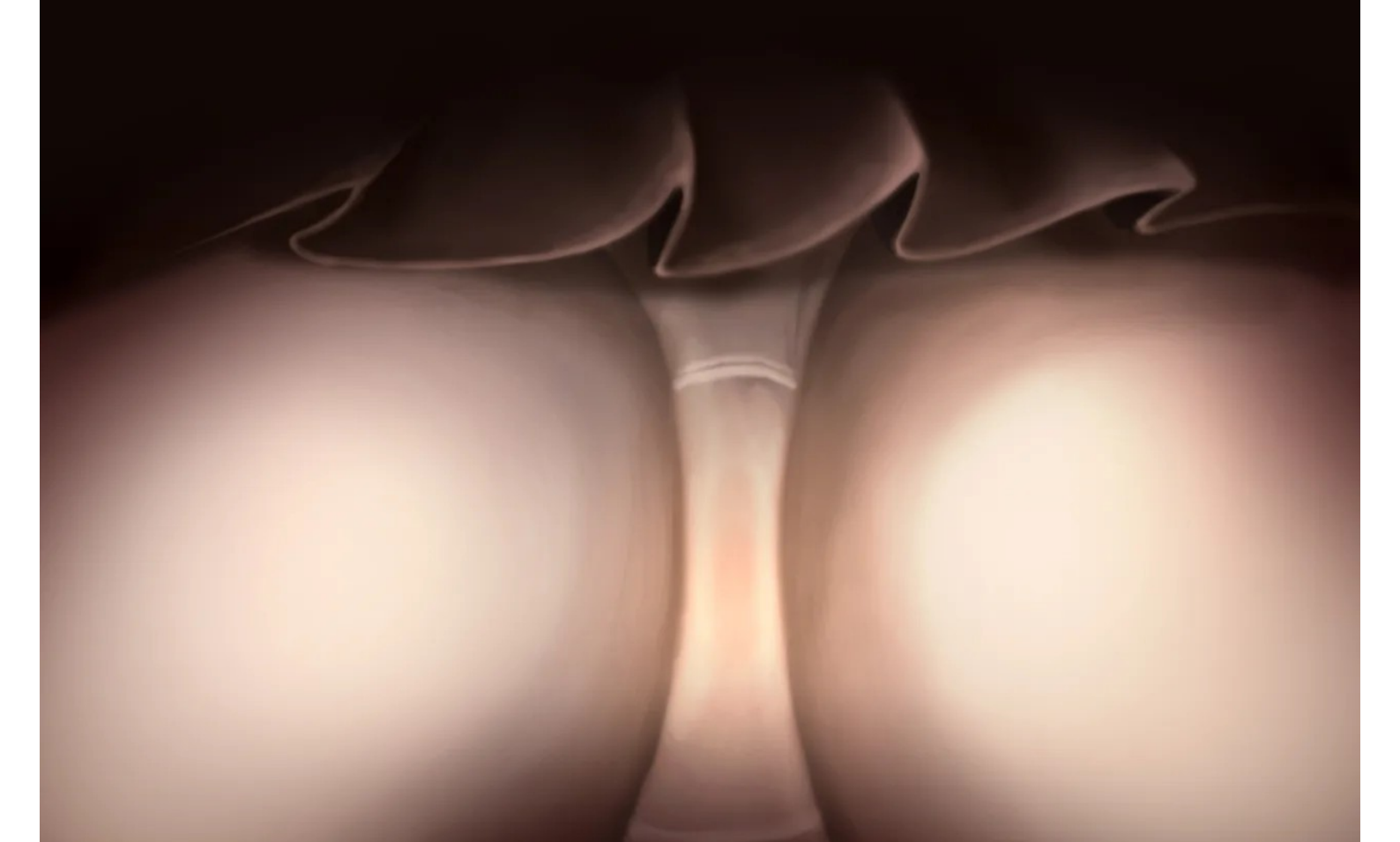
昼休みが終わり、体育の時間になった。外でサッカーだった。性欲を発散させようと張り切ったところ盛大にこけてしまい、膝をかなり切ってしまった。血が結構出ている。先生に報告して保健室に行くことになった。

水飲み場で足を洗い保健室へと向かう。たどり着いて扉を開けるもそこには誰もいなかった。どうしたものか。動くのもじんじんするので、少しの間待ってみることにした。

椅子に座ってぼーっとしているとベッドの方から音がした。カーテンがあるため向こう側は見えないが誰かいるのだろう。好奇心に負けそっと覗く。

はいっ、きました。お・ぱ・ん・つ・う神よ。今日は試練の日なのですね。俺は屈しない。たとえどんなイベントが待ち構えていたとしても乗り切ってみせる。そしてオナ禁パワーでモテモテになって可愛い彼女を作るんだ。

おっと思考が勝手に一人歩きしていた。いかんいかん。こんな目に毒な光景を前にしては意志が揺らいでしまう。



立ち去らなければという意志に反して、体は勝手に近づいていく。ふむふむ、これは良い形だ。それに近づくと聖なる香りすら感じる。鼻の感覚も鋭くなっているのだろうか。

だめだ。今すぐ離れるんだ。こんなところ誰かに見られたらおしまいだ。それに彼女が目を覚まして、脅されてもしたらオナ禁彼女大作戦が一瞬にして崩壊してしまう。わかってるのか俺。

そんな事はわかってる。だがよく考えてみる。こんなチャンスこれから先二度と無いかもしれないんだぞ。今やらなければ将来後悔するかもしれない。やらずに後悔するならやって後悔した方が何倍もマシだろうが。

馬鹿か俺。それは犯罪だ。捕まる。そしたら人生おしまいだ。犯罪者のレッテルを貼られてみる。彼女どころか若い女性に関わることもできなくなってしまう可能性が高い。

それはそうだな。いつときの感情に流されて人生を棒に振るなんて馬鹿げている。これは神の試練なのだ。そんなに簡単にはずが無い。危うく自分に負けて大変な事をしてしまうところだった。

急いでその場を離れ、椅子に座る。それから数秒後に保険の先生が来たのだった。



先生に治療されながら考えている事。それは先ほどベッドで寝ていた彼女に入れる事だった。おちんぽを彼女のおまんこに。流石に濡れていないだろうから、寝ている間に体を弄って愛液でとろとろになったところズプリ。

「大丈夫か、顔赤いぞ」  
「あつ、大丈夫です」

思考が読める世界じゃなくてよかった。そんな世界だったら一発通報ものだ。いや待てよ。誰でもそういう事考えるのだろうか。実際に他人の頭の中は見えないのでわからないが、自分が思うなら他人も思うだろう。という事は彼女も思ったりするんだろうか。それが読めるようになれば可愛い子と合体し放題なのに。そんな力どっかに落ちてないだろうか。もしくはそういう状態にできる力。

そもそもどういう時に女性は欲情するのだろうか。それを見極めるにはどうすればいいか。自分を磨くのも大事だろうけど、見極める目も必要だ。これはやはり経験がものをいうのだろうか。前読んだ本に書いてあった。目標を一つに絞って行動すれば必ず達成できると。俺の目標はなんだ。可愛い彼女を作る事か。彼女と楽しい生活を送ることか。それとも朝から晩までエッチな事をしたいのか。なるほど、こうやってたくさんさんの望みがあると思考が分散してしまっただけで方向性が定まらないのかもしれない。となると一つに絞る必要がある。

初めてのJK

「どお、私のおっぱい気持ちいい？」

「柔らかくて最高だよ」

「えへへ、嬉しい。いっぱい気持ちよくしてあげるね」

JKのおっぱいに包まれて幸せだ。

「よくこういう事してるの？」

「ううん」

動きが止まってしまった。

「ん？」

「実は今日が初めてで」

「どうしたの？」

「だからうまくできるか心配で」

「大丈夫だよ、凄く気持ちいいし可愛いよ」

「ありがとう」

「それはこっちのセリフ」

「えへへ」

「それに見てごらん」


「わあ、さっきよりおっきい」

「でしょ」

「興奮してるの」

「もちろん、体は正直だからね」

「嬉しい」



下から入れてJKの大きなおっぱいで挟んでもらってにゅぷにゅぷ。おっぱいが上下する度に先っぽが出たり入ったりして卑猥だ。乳輪を両手で支えちんぽに押し付けたりもしてくる。ちんぽに新たな刺激が加わって大興奮だ。

「うまくできてる？」

「ん、上手だよ」

「ビクビクしてる」

「ん」

「痛くない？」

「気持ちいい」

「いつでも出していいからね」

むにむにむに

JKの大きなおっぱいが目の前でぐにぐにと形を変える。それをじっくり眺めていると快感が押し寄せてきた。

「ん、いくっ」

「わわっいっぱい」

ビュクビュクビュク

JKの胸元を白濁液が流れていく。

「凄く気持ちよかったよ」

「えへへ」

幼馴染のJK

「そんな顔してどうしたの」

「触るなんて聞いてないよ」

「見るだけとはいってないから」

「オナニー見たいって言ったじゃん」

「そのつもりだったんだけどっいつ」

「触りたくなっちゃったの？」

「そういう事」

「してくれるの？」

「してほしい？」

「それはもちろん。してくれるのなら嬉しいけど」

「じゃあしてあげない」

「えー」

「冗談だよ」

手でしゅっしゅっとしごいてくれる。なかなか気持ち良いのだがもっと刺激が欲しい。

「おっぱい見たい」

「凄い注文つけてきたね」

「ダメ？」

「別にいいけど」

ガバツと脱いでくれた。男前である。

「これでいいの」

「うん、ありがとう、たってるね」

「それは言わなくていいから」

「えへへ」



パクリ

「うわ」

「ん、どうした」

「口でしてくれるの」

「あっ、嫌だった？」

「嫌じゃないっ」

「それじゃあ」

JKがちんぽを美味しそうにくわえ舌でペロペロと舐めてくる。ちんぽ全体が温かさに包まれ未知の快感が押し寄せてくる。

ジュルツジュチュジュジュ

「んんっ」

それと同時にタマタマを優しく手でマッサージしてくれる。これもまたとんでもなく気持ちいい。

「レロレロ、んちゅっ」

ジュジュ、ジュジュツ

吸われてるっ。

「あーもう我慢できないっ」

「えっ」

「ちよっと横になって」

「うん」

言われた通り横になる。腰の上にまたがるJK。次の瞬間。ズプリ



「あんっ、凄い、大きいっ」

くっ、なんだこれ、気持ち良すぎる。これがJKの生おまんこの威力だということのか。俺のちんぽがズッポリとJKおまんこに入ってしまった。というか食べられてしまっている。JKが腰を前後左右にくねくねと動かして来る。なんて高等テクニクだ。もうすでにノックアウト寸前だ。

「ちよっと待っていつちやう」

すると腰の動きを止めてくれた。

「勝手にいつちやダメだからね」

「それならちよっと休憩」

「落ち着いたら言ってね」

「ん」

JKのおまんこに入れて落ち着けというのは無理な話な気がするのだが。

「大きくなってるよ」

「嬉しくて」

「それは良かった、じゃあ動くね」

「まだダメだよ」

「えー」

「いってもいいなら好きにどうぞ」

「むう、そんなわがままいう子には」

腰をそっと持ち上げる。

「抜かないで」

「そんな事するわけないじゃん」

「そいうと腰を一気に落としてパンパンと上下させてくる。もちろん我慢なんてできなかつた。」

不思議な国のJK

「ほら、欲しいんだろ」

「はい、もっとたくさん欲しいです」

「やっとな素直になりましたね」

「最初あんなに嫌がってたのに」

「さすが兄貴っす、ばねえっす」

「俺にかかればざっとこんなもんよ」

「入れてもいいっすか」

「まあ待て。俺に考えがある」

「へい」

「どんな凄い事をしてくれるんすかね」

「黙って見とこうぜ」

「それじゃあちよっと準備するから待ってな」

「その間ぶっかけててもいいっすか」

「出しすぎて出なくなっても知らないからな」

「性欲めっちゃ溢れてるんで大丈夫っす」

「なら自分もっ」


「ほどほどにな」

「へい」

「うっす」

さてとあれを使ってみるか。ポケットからハサミを取り出し安全カバーを外す。そして自分の髪を少し切る。それを地面に足で描いた魔法陣の上に置く。すると髪が消え触手が現れた。

「あなたのご主人様ですか」



「このJKを気持ち良くさせてみてくれ」  
「どんな方法を使っても」  
「傷つけなければ許可する」  
「かしこまりました」  
「兄貴」  
「えっ、俺夢でも見てるのか」  
地面がJKを飲み込み顔とおっぱい以外は埋まってしまった。するとJKがひくひくと痙攣しだし、気持ち良さそうな声をあげる。  
「なんだこの声」  
「聞いてるだけで出そうっす」  
「すみません、兄貴、先にいくっす」  
「お、おおう」  
ぶっかけられさらにエロさを増すJK。  
「そのくらいでいい」  
「かしこまりました」  
土がうねりJKが地面に横たわる。体はうっすらと赤みをおびひくひくと震えている。凄まじくエロい。



## 発情期のJK

朝起きると頭がぐわんぐわんしていた。こんな日にはJKの体を見て脳を癒したい。そんな事を考えながらぼーっとしていると、視界がぶれた。左右の目で違う光景が見えているのだ。片方は自分の部屋、もう片方はこれはどこだろうか。ロッカーがあるのも更衣室とかだろうか。

片目を閉じて色々試してみる。自分の部屋は自由に体を動かす事ができる。それはそうか自分の体と目だもんな。そして問題の左目。右目を閉じて見えるのは相変わらず更衣室。どうしてこんな事に。試しに視界を動かそうとするも動かせるのは瞳のみでそれ以外は無理だった。体を動かしても視界は全く微動だにしない。どうしたものかと思っっているとか何が視界に入ってきた。

うおっ、気配も音もなく現れるとは恐るべし。それとも向こうの音は聞こえないのだろうか。耳をすませるも聞こえるのは自室周辺の音だけのようだった。視界と耳から聞こえる音が一致しないのはなんだか変な感じだ。視界に入ってきたのは、どうやらJKのようだ。ん、もしかして。次の瞬間、期待通りJKが服を脱ぎ始めるではないか。なんたる光景、誰にも咎められずに、犯罪を犯さずにJKの生着替えを見られるなんて素晴らしい。この左目に感謝せねば。しっかりと焼き付けよう。



JKの生着替えを鑑賞中に思った。視点を換えたいと。何が見たいって。そんなの決まってる。JKのおぱんつが見たいのだ。一体どんなおぱんつをはいているのだろうか。純白だろうかそれとも黒のフリフリそれとも紐ぱん。見たい、JKのおぱんつが見たい。そんな事を考えながら瞬きをした瞬間視界が変わった。目の前に広がるのはJKのおぱんつ。おういえっ。この目は最高だ。これでJKの体見放題じゃないか。たまらん。JKのおぱんつが目の前に。匂いまで漂ってきそうだ。スーハースーハー。流石に匂いを感じる事はできなかった。でもいいんだ。普段見られないものが制限なく見れる。こんな素晴らしい事はない。このもり上がりこの奥にJKのおまんこがあるのか。こんななじっこり見る機会なんて今までの人生の中で一回もなかった。それはそうだろう。彼女とかいないと無理だ。彼女がいても相理解のある彼女でなければ引かれておしまいだろう。今はこのJKおぱんつを堪能しよう。後の事はまた改めて考えればいい。


はっと我にかえり右目で時間を見ると結構やばい時間になっていた。これはいかん。仕事に遅れる。急いで準備しなければ。左目どうしたものか。恐る恐る左目を開くとそこには自室の光景が。夢じゃないよな？



仕事が終わりが飯を食べ風呂に入りベッドに横になる。仕事中は左目はいたって普通だった。朝の事が夢か幻かと思えるほどに。流石に外であの目を使うとやばそうだったので試さなかったというはあるのだが。

さてとこれからは自分だけの時間だ。好きに使う事ができる。さて何を見よう。やはりセックスか。JKがセックスしてる姿を見たい。それもとびきり可愛い子がいい。そんな子が後ろからガンガンつかれて喘いでいるところを。そんな事を考えながら閉じていた左目を開ける。

素晴らしい。これは素晴らしいぞ。まさしく目の前でJKがセックスをしている。AVとは比べ物にならない。音がないのが少しだけ残念だがそこは想像力でカバーだ。それにこの迫力はやばい。目の前でJKがセックスしているのだ。それもとても気持ち良さそうな顔をして。しかもこの角度男の顔は見えない。それがいい。やっっている男などどうでもいいからな。揺れるJKの体JKのおっぱい、そしてエロ可愛い表情。どストライクだ。そんなJKを見ながらしごいてみた。最高に気持ちよかった。



一度出して満足かと思いきやすぐにまた大きくなった。JKの威力はやはり半端ではない。正面からでもいいのだが後ろというか結合部が見て見たい。そう望むと視界が切り替わった。

おおっ、これは凄い。JKおまんこにちんぽが出たり入ったり。こんな風になっているのか。実際に入れていたらこの角度からは生では見られない。それがこんな間近で結合部を観察できるとは。なかなか興奮する。見ているだけで我慢汁がだらだらと溢れてきた。

しっかりと観察しながら自分のものが入っていると想像してしごく。JKのおまんこの柔らかさを、そして絡まりついてくる膣ヒダを想像する。そうすると一段と快感が高まった。

続けているうちに我慢できなくなり盛大に出した。自分の体がひくひくと震えているのがわかる。こんなに気持ち良い事があるとは思ってもいなかった。

後片付けをしながらJKを眺める。どうやらまだやっているようだ。凄い性欲だな。自分も強い方だと思っていたのだが全然まだまだだったようだ。上には上がいるのを感じた瞬間だった。

片付けも終わり気持ちも落ち着いたところで眠る事にした。ベッドに横になるとすぐに睡魔が襲ってきた。



朝目を覚ますと、昨夜あれだけ出したのにすっかり朝立ちしていた。一晩眠って回復したようだ。今日は仕事も休みだし、朝から楽しむのもいいかもしれない。そんなこんなで左目を開眼する。

目の前に映るのは先日の子Kだった。朝からお盛んな事だ。今日は上に乗って自ら腰を上下させている。

パンパンパン

と心地良い音が今にも聞こえてきそうなくらいリズムカルに愛液を撒き散らしている。実に素晴らしい光景だ。いくらでも見えていられる。しかも制服を着たままなのでチラチラと見えたり見えなかったりでエロさ倍増だ。よくわかっていらっしやる。

同じ体勢になりあたかも自分がその場にいるかのようにしてみた。すると腰のあたりがムズムズして高鳴りを感じた。手でしごいてみると昨日より快感がましている。

映像も相まって脳が今自分に起きている事だと錯覚しているのかもしれない。まあ気持ちよければなんでもいい。今はこのJKとのセックスを最大限に楽しむまでだ。

それから色々な体勢を試し何度もいった。

身体が震え自分のものではないと感じる事もあった。これがJKの力なのかと神に感謝した。



どれくらいそうしていただろうか。左目を使いエツチに明け暮れていると、不意に身体感覚がおかしくなった。左目以外の感覚がなくなり、次の瞬間、音が聞こえた。

JKのおまんこに腰を打ち付ける。その感触がダイレクトに伝わってくる。音も声もだ。一体何が起きているのだろうか。ただただ気持ち良い。

「あっ、ああっ」

とてつもなく可愛いJKが自分の下でおまんこをつかれ喘いでいる。今はこのJKの中に出すことだけ考えよう。いっぱいいっぱい出してそれからまた考えればいい。

人生は一度、今この瞬間も一度。後悔など微塵も残さずに過ごす。JKのおまんこ、JKとのセックスを全身で感じて楽しむんだ。

それから何時間していたかわからないが、お互い疲れて動かなくなるまで激しく交わり続けた。汗と精液と愛液の匂いが混じり合い、すごく濃密な香りが二人の周りを漂っている。

JKの裸に抱きつき心地良い疲労に身をまかせる。このまま世界が止まって欲しいと思えるほどに幸せを感じている自分がいた。